

「心」を生み出しているのは 内臓である!?!—西原 克成氏



心と内臓の結びつきの深さを指摘したのは、「天才」と称される解剖学者の三木 成夫氏である。学生時代に聴いた三木氏の「生命の形態学」の講義に感銘を受け、脊椎動物の進化の歴史について独自の研究を進めた西原 克成氏は、「心」は内臓に宿るという説を展開している。医学者の立場から「心」の所在を大胆に論じたものとして、この説は注目される。そしてまた医師でもある西原氏は、その独自の研究成果を踏まえて、免疫病などの難病の治療に取り組んでもいる。

自我とは腸にある ふてぶてしい内臓感覚だ

心は脳に宿るというのが現代科学の常識である。だが、脊椎動物の進化の歴史を研究してきた西原 克成氏は、その常識に異を唱え、「心を生みだしているのは内臓である」と明言する。「生命現象とは、外界から消化吸収した栄養と酸素とを反応させて、エネルギーの渦をめぐらせながら古くなった細胞を新しくつくりかえることによってエイジング(老化)を克服するシステムのことです。生命の本質であるリモデリング(新陳代謝)は、まず腸からの酸素と栄養の吸収がなければ何事も始まりません。この吸収能力がリモデリングの能力、つまり欲求となります。腸の消化・吸収の能力と、腸の好き・嫌いが、とりまなおさず、五欲の源なんです。たとえば食べ物の好き嫌いというのは、腸管の吸収と排出能力の好き・嫌いに基づく——腸の粘膜の上皮細胞の吸収の傾向性を意味するわけです。

高等生命は腸から生まれ、腸がなければ生命はない。心は腸にあるのです。まず腸管上皮に備わった神経が、腸管の内腔と腸管の内臓平滑筋の状況を身体の皮膚の筋肉(体壁筋肉)に知らせ、その知らせを受けて体壁筋が動きます。つまり腸が感じて、体

西原 克成(にしはら・かつなり)氏

西原研究所所長。1940年、神奈川県生まれ。東京医科歯科大学卒業。東京大学大学院医学部博士課程修了。医学博士。東京大学医学部口腔外科教室講師を経て、現在、日本免疫病治療研究会会長。人工歯根、人工骨髄の開発における第一人者。第32回日本人工臓器学会オリジナル賞第1位受賞。著書に「内臓が生み出す心」(NHKブックス)、「生物は重力が進化させた」(講談社ブルーバックス)、「免疫病は怖くない」(同朋舎・角川書店)、「重力対応進化学」(南山堂)ほか多数。

の筋肉がその望む方向に動く。それが動物が感じて動く感動の始まりです。自我とは五欲の本能に根ざした生命個体に備わった生存欲であり、腸にあるふてぶてしい内臓感覚のことなんです」

心が内臓に宿ることを示唆する内臓移植例がある。心肺同時移植を受けたアメリカの女性が出版した本『記憶する心臓』(邦訳1998年)によると、事故死した若い男性の心臓と肺を移植されて以来、その男性の心が住み着くようになってしまったというのだ。

脊椎動物の進化は 重力を主因とした力学作用で起こる

脊椎動物の起源をたどると、原索動物のホヤの祖先ムカシホヤにたどり着くという。ホヤは袋のようなつくりの生き物で、養分吸収の腸管と呼吸のための鰓腸さいちようからなる。ところがホヤの子供は魚形で、オタマジャクシのような尻尾をもつ。それが幼形進化(子供の形のまま大人になること)したものが魚へと進化したとされる。この魚が、地球規模での造山運動に伴い、海から陸へと上陸することで、鰓呼吸から肺呼吸への転換という一大イベントが起きたのである。今から約3~4億年前、古生代の頃だ。

「サメを実際に陸に上げて、その変化を検証してみました。サメは水中では鰓呼吸をしていて、血圧も低い。それが陸に上げられると、苦しいからのたうちまわって、血圧が上がります。これを繰り返し経験するうち、1時間陸上に放っておいても平気になり、鰓で空気呼吸ができるようになることが実証的に確認できました。血圧が高まると、血流が増えて体内の流動電位が高まり、その作用で間葉細胞の遺伝子の引き金が引かれて軟骨が硬骨化し、ついには骨髄に造血組織ができ上がります。脊椎動物の各進化

のステージでは、突然変異によってではなく、重力や流動電位などのエネルギーや化学物質などによって細胞の遺伝子が発現し、たとえば軟骨が硬骨化して骨髄造血系などが獲得できたのです」

こうした実証実験を踏まえて、西原氏は突然変異と自然淘汰によって生物進化を説明するダーウィン主義を批判する。脊椎動物の進化においては、重力が大きな役割を果たしているからであり、その進化は力学的に説明できると考えるからだ。こうした“重力説”も含め、生物進化のメカニズムをちゃんと解明しないかぎり、心のありかもわからない。

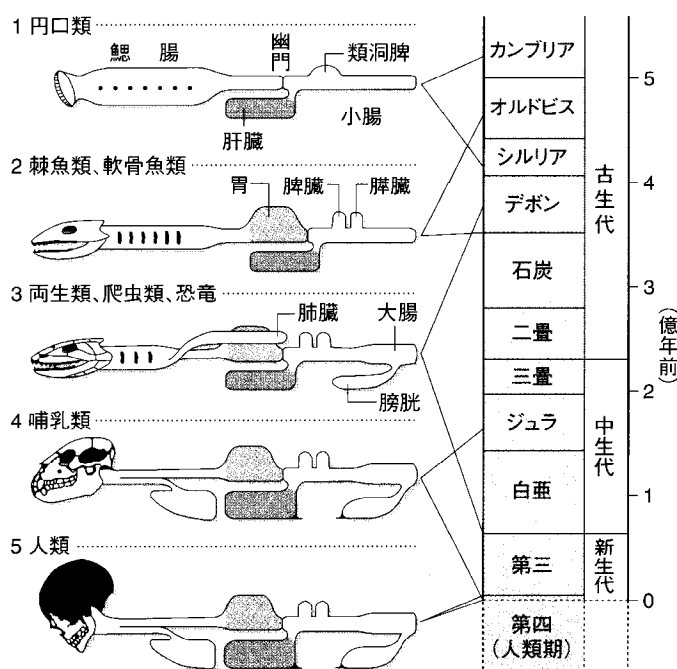
「顔は解剖用語では内臓頭蓋ないぞうとうがいと呼ばれます。それは、口腔を中心とした顔が鰓や腸の内臓器官から生まれているためです。顔は骨格をもった腸管なんです。ヒトの顔の原型はネコザメという原始脊椎動物の軟骨魚類の顔に求めることができますが、ネコザメの外鼻形の顔はヒトの胎児の34日目のそれと細部に至るまでソックリです」

ところで、「脳」とは何か？ 思考を担うのは、いわゆる「脳(大脳)」だが、西原氏によれば「脳とは、腸粘膜(内胚葉上皮)の神経と、皮膚(外胚葉上皮)の神経の合体した神経管の束であり、脳は腸から始まっていて、腸には従属的。財産争いも色情も名誉欲も理性で制御できないのは、腸管内臓に宿る五欲のせいだ」ということになる。

ヒトの病気の原因は 哺乳動物としての“掟破り”にある

西原氏は現場の医師でもある。呼吸法を改善したりして、免疫システムの異常によって起こる免疫病を実際に治癒させてきた。

「ヒトの病気は哺乳動物としての“掟”を破っていることに原因があります。“掟破り”は3つあって、その1つは、生後5~6カ月で赤ちゃんに離乳食のタンパク質を与えていることです。赤ちゃんの腸は、大人の腸と違い、タンパク質を消化しないですべて吸収してしまいます。それで便が緑便になり、体内で抗体をつくるために、アトピー性皮膚炎などのアレルギー症状が出てしまうのです。赤ちゃんは、母乳で育てなければいけないというのが哺乳動物の掟なんです。2つめは口呼吸をしていることです。哺乳動物で口呼吸ができるのは1歳以降の人類だけです。鼻からしか呼吸しないとというのが哺乳動物の掟なんです。鼻から呼吸すれば鼻には浄化



顔の起源は腸管—腸管内臓系の系統発生とその完成期(三木 成夫原図改変)
出典:西原 克成「生物は重力が進化させた」(講談社ブルーバックス)

装置があるのでバイ菌の感染が防げますが、口で呼吸すると、扁桃リンパ組織がバイ菌に感染し、白血球によって喉からそのバイ菌が体中に運ばれてしまいます。

3つめは人類特有の生活様式です。直立二足歩行ということと、日本などでいえば冷たいものを摂取するようになったこと、その2つが関係しています。冷蔵庫が普及したことで腸を冷やすようになりました。4℃のミルクやビールを飲めば、腸管造血系がダメージを受け、潰瘍性大腸炎やリウマチといった難病になります。また、二足歩行によって、立ったり、座ったりするとエネルギーをすぐ使う。骨髄造血は立ったり、座ったりしているときは行われませんから、横になって睡眠をたっぷりとり、体から重力を解放してやらないと、白血球がくたばってしまい、過労死なんかを起こしてしまうわけです」

“掟破り”のツケは、ヒトの生物としての生命力を弱め、さらには医療費の増加という形で国家財政を圧迫している。生物の進化史をしかと踏まえた文明の構築が求められる。

たじか・のぶかず

作家。1953年生まれ。東北大学工学部建築学科卒業。現代科学、現代思想を独自に追究する一方、現代社会における個人の自立的な生き方を追究している。著書に『苦悩する「科学」』(ぶんか社)や、ヒューマンイデオの未来を探る『未来のアトム』(アスキー)など。近刊に、『超「戦争論」上・下』(アスキー・コミュニケーションズ、思想家・吉本隆明氏へのインタビュー本)がある。